

上代日本語における統語構造の一考察

—『萬葉集』における「係り結び」構造から—

上 野 貴 史

【キーワード】係助詞、カートグラフィー、活格言語、分裂文、名詞化節

1. はじめに

大野(1993)では、上代日本語の文を欧米言語などのような「主語—述語」という基本構造で考えるのは適切ではないと指摘した上で、(1)のような基本的な二つの型を提示している。

- (1) a. あらかじめ題目語あるいは条件を立てて、それについての説明をその下に加えるという型：「我は忘れず」
 b. 前もって題目を設定することなしに、生起する現象をいきなり描写し、記述するという型：「萩の花咲けり」
 (大野 1993: 336)

日本語の主節における基本的な構造である(1a)は、(2)で示すように、係助詞「ハ」で題目を取り立て、終止形(conclusion)で終止するという「前提(presupposition)—焦点(focus)」構造をなす。

- (2) 【前提】_{ハ}【焦点】_{終止形}

この題目部分が説明部分と倒置し、文末の述語が連体形となるのがいわゆる「係り結び」と呼ばれる構造であるが、(1b)は、(3)のような「係り結び」の従属節に出現する。

- (3) [白砂三津の埴生の色に出でて言はなく]のみぞ[我が恋ふらく]は (11/2725¹⁾)
 白細砂三津之黄土色出而不云耳我恋染者

(3)における「白砂三津の埴生の色に出でて言はなく」と「我が恋ふらく」という節は、連体形(adnominal)で終止する名詞化節(nominalized clause)となっている²⁾。

このように、上代日本語において主節と従属節は異なる配列を持つ。そこで本稿では、『萬葉集』をコーパスとし、文の基本構造である終止形節に見られる対格アラインメント(accusative

alignment)と、「係り結び」構造に代表される連体形節における活格アラインメント(active alignment)という異なるアラインメントを取り上げ、それぞれのアラインメントにおける格付与(Case-marking)について考察を行う。続いて、係助詞におけるカートグラフィー(the cartography of syntactic structures「統語構造地図」)に着目し、「係り結び」構造の分裂文(cleft sentence)分析を行う。このことにより、上代日本語における典型的な文の統語構造を明確にすることが本稿の目的となる。

2. 上代日本語における終止形節と連体形節

2.1. 終止形節の統語構造

Kuroda(2007)では、終止形節は(4)のような線的表示化(linearization)で示される定形節(finite clause)であるとしている。

(4) [_{CP} Spec[_C [_{TP} DP[_T Agr[_{VP} [_I V]]]]]] _C C_s]]

(Kuroda 2007: 297、一部改変³⁾)

(4)は、終止形節の補文標識(C_s)が定形 Inf である Agr を選択し、VP から TP へ移動した主語 DP と一致することを示している。このような終止形節は、Yanagida & Whitmar(2009)によると対格アラインメントになるとされるが、まず、この格付与に関して(5)のような終止形節を考察してみる。

(5) a. 天地の神を乞ひつつ我待たむ (15/3682)

安米都知能可未乎許比都々安礼麻多武

b. 梅の花今盛りなり (5/820)

烏梅能波奈伊麻佐可利奈理

c. 我草取れり (10/1943)

吾草取有

d. 海人娘子ども玉藻刈る見ゆ (17/3890)

安麻乎等女登母多麻藻可流美由

e. わご大君国知らすらし (6/933)

和期大王国所知良之

(5)における述語は、(a)が活格動詞、(b)が不活格動詞(inactive verb)、(c-e)が他動詞となっている。これらの終止形節に共通していることは、文頭にある主語(a/c:「我」、d:「海人娘子ども」、

e:「わご大君」と不活格主語(S_o)、b:「梅の花」が無助詞(ϕ)であるということである。このように活格動詞・他動詞の主語である外項(external argument)と不活格動詞の内項(internal argument)が同じ格で示されることは、対格アラインメントの特徴の一つであり、上代日本語の終止形節においては $-\phi$ が使用されている。(5c)の主格付与を簡略的に示したものが(6)となる。

(6) [TP 我 $-\phi$ [VP 我 [V 草 取れり]]]

(6)は、VP 指定部にある他動詞の主語「我」が TP 指定部に移動し、定形 Inf である $-\phi$ を受け取ることを示している。

次に、終止形節における目的語の格標示であるが、これは(5c-e)にあるように無助詞となっている。このような目的語の $-\phi$ 格付与に関しては、Miyagawa(1989)は動詞から構造格を受け取るとし、Kuroda(2007)も動詞によって格付与されるとしている。一方、Aldridge(2018)では、この $-\phi$ が内在部分格(inherent partitive case)で、VP 内に留まると主張している⁴⁾。本稿では、終止形節が対格アラインメントを示すという立場から、主節の $-\phi$ は動詞によって付与される構造格であるという考え方をすることにする。(6)に $-\phi$ 対格付与操作を加えたものが(7)となる。

(7) [TP 我 $-\phi$ [VP 我 [V 草 $-\phi$ 取れり]]]

(7)は、V「取れり」が隣接するDP「草」に対格 $-\phi$ を付与していることを示している。述語が他動詞における格付与を一般的に示すと(8)のようになる。

(8) [TP DP₁ $-\phi$ [VP DP₁ [V DP₂ $-\phi$ V]]]

さらに、述語が活格動詞である(5a)と不活格動詞である(5b)の格付与を示したものが(9)となる。

(9) a. [TP 我 $-\phi$ [VP 我 [V 待たむ]]]
 b. [TP [VP [V 梅の花 $-\phi$ 今 盛りなり]]]

述語が活格動詞である(9a)では、外項である主語(S_A)「我」が VP から TP 指定部に移動して主格 $-\phi$ を受け取る。一方、不活格動詞を持つ(9b)では、動詞の内項であるDP「梅の花」が動詞から対格 $-\phi$ を受け取っている。これらは、表層表出(surface representation)が同じであるが、基底構造が異なっているため、異なる方法で $-\phi$ 格が付与されている。

他動詞における目的語には、(10)のように、 $-wo$ が付与されているものがある。

(10) a. 東女を忘れたまふな (4/521)

東女乎忘賜名

b. 君を待ち出でむ (11/2484)

君乎待出牟

Kuroda(2007)には、格助詞・接続助詞・間投助詞の機能を持つ「ヲ」が、上代日本語では、対格マーカーではなく間投機能(interjective function)であるという指摘がある。この指摘は、(11)のように目的語以外にも *-wo* が付与されている例からも妥当なものと思われる。

(11) a. ほととぎす今城の岡を鳴きて越ゆなり (10/1944)

霍公鳥今城岳 鳴而越奈利

b. 別れなばうら悲しけむ我が衣下にを着ませ (15/3584)

和可礼奈波宇良我奈之家武安我許呂母之多尔乎伎麻勢

(11a)の「今城の岡」は移動性動作の経由点、(11b)の「下」は動作の場所を表す付加詞(adjunct)句であり、これらに *-wo* が付与されている。このような例から、*-wo* は対格ではなく、移動により付与される一種の談話マーカーであることが窺える。

-wo が付与される DP の移動する位置に関して、Yanagida & Whitman(2009)では、*v* と T の間にある機能句である AspectP の指定部であり、その主要部にある [+transitive] 特性が DP を引きつけるとしている。この DP が移動する位置を *v* と T の間にある TP 内機能投射として、(10a)と(11a)の派生を記述したものが(12)となる。

(12) a. [TP [FocP 東女 - ϕ [Foc [Focus -wo] vP [VP 東女= ϕ 忘れたまふな]]]]]]

b. [TP ほととぎす - ϕ [FocP 今城の岡 - ϕ [Foc [Focus -wo] vP [VP ほととぎす [v' 今城の岡= ϕ 鳴きて越ゆなり]]]]]]]

(12a)は、述語から対格 ϕ を付与された DP 「東女 - ϕ 」が FocP に移動し、Focus マーカーである *-wo* が付与されていることを示している。また、(12b)は、DP が FocP に移動し *-wo* を付与されると共に、主語「ほととぎす」が TP 指定部へ移動し ϕ を受け取ることを示している。さらに、「ヲ」句は、(13)のように、無助詞主語の前に出現する。

(13) a. 雨の降る夜をほととぎす鳴きて行くなり (9/1756)

雨零夜乎霍公鳥鳴而去成

b. 木の暗の繁き尾の上をほととぎす鳴きて越ゆなり（20/4305）

許乃久礼能之氣伎乎乃倍乎保等登芸須奈伎弓故由

(13)のような「ヲ」句の前置は、scrambling「かき混ぜ」によって生じるものと考えられ、上代日本語においては、TP内FocPに加えてCP位層(CP layer)にも機能投射が存在することが示唆される⁵⁾。scramblingとして(13a)の派生を示すと(14)のようになる。

(14) [CP [FocP 雨の降る夜 -WO [TP ほととぎす - ϕ [FocP 雨の降る夜 [Foc [Focus -WO] vP [VP ほととぎす [v 雨の降る夜 鳴きて行くなり]]]]]]

(14)は、(12)と同様、TP内FocPにおいて -wo が付与された「雨の降る夜 -wo」がさらにCP位層のFocPに移動していること示している。

本節では、対格アラインメントである終止形節において、動詞の外項がVP指定部からTP指定部へ移動することにより - ϕ を付与され、動詞の内項が動詞から構造格 - ϕ を付与されることを示した。また、DPの移動による -wo 付与がTP内FocPにより行われ、さらに、CP位相にも同様の談話構造があることを指摘した。この終止形節における統語構造を一般化して示すと(15)のようになる。

(15) [CP [C [FocP (XP- ϕ -WO)] TP DP- ϕ [FocP (XP- ϕ -WO)] vP [VP $\bar{D}P$ [v (XP- ϕ) V]]]] C Cs]]

2.2. 連体形節の統語構造

節自体が名詞化する連体形節は、従属節や関係節に多く出現する。連体形節で述語が他動詞のものとして(16)や(17)のような文がある。

(16) a. [国栖らが春菜摘むらむ]同馬の野（10/1919）

国栖等之春菜將採司馬乃野

b. [佐用姫の児が領巾振りし]山の名（5/868）

佐欲比売能故何比列布里斯夜麻能名

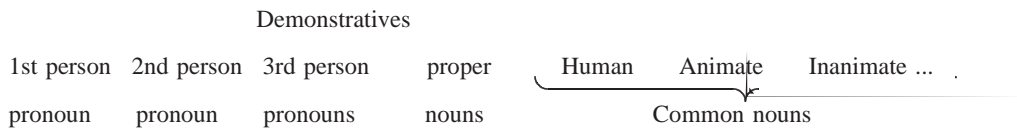
(17) a. [志賀の海人の塩焼く]煙（7/1246）

之加乃白水郎之焼塩煙

b. [みどり子の乳乞ふ]がごとく（18/4122）

弥騰里兒乃知許布我其登久

(16)と(17)の連体形節においては、目的語は終止形節と同様、 $-\emptyset$ で標示されているが、主語は $-ga$ ((16))と $-no$ ((17))といった属格で出現する。このような $-ga$ と $-no$ との使用分布は、NP分裂能格体系(NP split-ergative systems)として知られている(Silverstein 1976, Dixon 1979, Garret 1990)。このNP分裂能格体系で使われる「NPの階層性」をDixon(1979)は<図1>のように示している。



likelihood of functioning as transitive agent

NP

Dixon 1979: 85

<図1>の「NPの階層性」は、より左側のNPが「行為者」(agent)として使用される可能性が高まることを示している。つまり、人称代名詞(personal pronoun)が最も「行為者」として使用される可能性が高く、逆に、普通名詞(common noun)の無生物名詞(inanimate)が最も低いことになる。Yanagida & Whitmar(2009: 112)では、連体形節における主語に関して、 $-ga$ は話者に近い人や特定(specific)の人間を指示する代名詞が「行為者」である場合、 $-no$ は非特定(nonspecific)の有生名詞(animate)や無生名詞(inanimate)の場合に使用されると指摘している。これは、<図1>における人間名詞(human)の特定・非特定というところで、NP分裂が起こっていることを示している。これを<図2>のように示す。

このような連体形節の主語の格付与に関して、Kuroda(2007: 297)では、主語DPがTP指定部に移動せず、VP内の元位置(in situ)で属格を付与されると指摘している。これは、 $-ga/-no$ が同じ位置で付与され、その選択は「NPの階層性」に依存する格付与であるものと思われる。一方、Yanagida & Whitmar(2009: 120)では、 $-ga$ がvP指定部で内在格として付与され、 $-no$ がDによって付与されると主張している。これは、 $-ga$ と $-no$ が異なる方法で格付与されるという立場であり、「DP- ga/no -DP」といった連体格用法の派生にも応用できるものである。本稿では、こ

の Yanagida & Whitman(2009)に沿って *-ga/-no* の派生を考察していきたい。

まず、(16a)と(17a)をこの格付与で示すと(18)のようになる。

(18) a. [_{VP} 国栖ら - \emptyset [_V -*ga* [_{VP} 国栖ら - \emptyset [_V 春菜 - \emptyset 摘むらむ]]]]

b. [_{DP} [_D [_{VP} 志賀の海人 -*no* 塩 - \emptyset 焼く]]]
↑
└──────────────────┘

(18a)の主語「国栖ら」は、VP 指定部から _{VP} 指定部に移動することによって *-ga* を受け取っている⁶⁾。一方、(18b)の主語「志賀の海人」は、VP の元位置に留まり D から *-no* が付与される。

他動詞の主語における *-ga/-no* といった格付与が行われる NP 分裂は、自動詞の主語においても *-ga/- \emptyset* という格付与で確認できる。

(19) a. [明日香川行く]瀬を速み (11/2713)

明日香河逝湍乎早見

b. [久木生ふる]清き川原に (6/925)

久木生留清河原尔

(20) a. [君が行く]道 (15/3724)

君我由久道

b. [我妹子が入りにし]山を (3/481)

吾妹子之入尔之山乎

自動詞の主語に関しては、(20)のように「NP の階層性」が高い主語の場合 *-ga* が付与され、低い場合は、(19)のように、 \emptyset が付与される。(20)と(19)の格付与は、(21)のように示すことができる。

(21) a. [_{VP} 明日香川 - \emptyset [_V 行く]]

b. [_{VP} [_V 久木 - \emptyset 生ふる]]

(22) a. [_{VP} 君 - \emptyset [_V -*ga* [_{VP} 君 - \emptyset [_V 行く]]]]]

b. [_{VP} 我妹子 [_V -*ga* [_{VP} [_V 我妹子 入りにし]]]]]

(21a)は、VP 指定部に位置する活格動詞「行く」の S_A である「明日香川」に \emptyset が付与され、(21b)は、不活格動詞「生ふる」の S_O である「久木」が VP 内で V より \emptyset が付与されることを示している。一方、(22a)の活格動詞「行く」の S_A である「君」は、VP 指定部から _{VP} 指定部に移動することによって *-ga* を受け取り、(22b)の不活格動詞の S_O である「我妹子」は、VP 内

から vP へ移動することによって *-ga* が付与される。

この NP 分裂に従わないものとして、S₀ が *-φ* ではなく *-no* で標示されるものがある。

(23) a. [にはほふ黄葉の散らまく]惜しも (10/2187)

仁宝布黄葉之散莫惜裳惜裳

[DP [D [VP にはほふ黄葉 *-no* 散らまく] D]]

b. [本葉の黄葉散らまく]惜しも (10/2215)

本葉之黄葉落卷

[VP 本葉の黄葉 *-φ* 散らまく]

(23)は、「黄葉」という S₀ にそれぞれ *-no/-φ* という異なる格が付与されている例である。活格言語においては、S₀ が他動詞目的語と同じとなることから⁷⁾、上代日本語の他動詞目的語が *-φ* であるため、*-φ* が無標の格標示であると考えられる⁸⁾。

次に、連体形節における「ヲ」句に関する考察を行う。主語が *-ga* で標示される「ヲ」句を含む文に(24)のようなものがあり、「...ヲ...ガ」という順序で出現する⁹⁾。

(24) a. [君を我が思ふ]時は (20/4301)

伎美乎安我毛布登伎波

b. [花橘を娘子らが玉貫く]までに (19/4166)

花橘乎 孀良我珠貫麻泥尔

-ga が vP 指定部で S_A に内在格ろ 飢焔 木做 q ね 乍 蘊 有 P より 死

である があう。このような

~~45B~~

また、主語の格に *-ga/ -no/ -o* が出現する統語構造を(30)のように示すことができる。

- (30) a. $-ga : [CP [C [FocP (XP-\phi-wo)]]_{VP} DP-\phi-ga [v [VP DP-\phi [v (XP-\phi)V]]] c C_r^{(10)}]]]$
 b. $-no : [CP [C [FocP (XP-\phi-wo)]]_{DP} [D [VP DP-\phi (XP-\phi)V]]] [I_D]]] c C_r]]]$
 c. $-\phi : [CP [C [FocP (XP-\phi-wo)]]_{VP} DP-\phi [v (XP-\phi)V]] c C_r]]]$

3. 係助詞のカートグラフィー

大野(1993)では、疑問詞を承けるかどうかによる「二系列」と、題目部分と説明部分のどちらで使用されるかという「上下二類」を分類し、係助詞の体系を<表1>のように提示している。

1993: 340

本節では、大野(1993)が設定している係助詞の上類である「ハ・モ・コソ」と下類である「ゾ・ヤ・カ」¹¹⁾に分けて、これらの共起から係助詞のカートグラフィーを考察する。

(41)における述語「出で立つ」(a)・「飽かず」(b)は、「八」に一致して終止形となっている。このように「八」句は右方転移し焦点化する((42))。

- (42) a. [CP [TP [TopP 我_{→pa} [VP 大君の醜のみ楯と出で立つ]]]] FocP 我 -pa]]
 b. [CP [TP [TopP 巨勢の春野_{→pa} [VP 飽かず]]]] FocP 巨勢の春野 -pa]]

このような係助詞「八・モ」は同じ位置で付与されると考えられるが、上代日本語には「八モ」という助詞連続がある。

- (43) a. 我が名はも千名の五百名に立ちぬとも (4/731)
 吾名者毛千名之五百名尔雖立
 b. 我を待たすらむ父母らはも
 阿袁麻多周良武知_ゝ波_ゝ良波母 (5/890)

(43)のような例から、係助詞「モ」には、係助詞「八」と同じ位置で付加する $-mo^2$ とは別に係助詞「八」の前でも付加する $-mo^1$ が存在することが分かる。(43)の派生を示したものが(44)となる。

- (44) a. [TP [TopP₁ 我が名_{-pa-mo} [TopP₂ 我が名_{→pa} [VP 我が名 [V₁ 千名の五百名に立ちぬ]]]]]]]
 b. [CP [TP [TopP₁ 父母ら_{-pa-mo} [TopP₂ 父母ら_{→pa} [FocP 我_{-ø-wo} [VP 父母ら [VP 我_{-ø} 待たすらむ]]]]]]] FocP 父母ら_{-pa-mo}]]]]]]]

(44a)は、主語「我が名」が TopP₂ で $-pa$ を受け取り、さらに TopP₁ で $-mo$ を受け取った結果「我が名はも」となっていると考えられる。(44b)は、(44a)と同じように、主語「父母ら」に $-pa$ と $-mo$ が付与された「父母らはも」が右方転移して文末に移動していることを示している。このように、係助詞「モ」は TopP₁ と TopP₂ という二つの位置で付与されると考えられる。

3.1.2 係助詞「コソ」

已然形接続する係助詞「コソ」は上類であるが、終止形節となる係助詞「八・モ」と異なり、連体形接続する下類の係助詞「ゾ・ヤ・カ」と同じ連体形節となる。

- (45) a. 朝はふる風こそ寄せめ (2/131)
 朝羽振風社依米

b. 我がやどの花橘にほととぎす今こそ鳴かめ (8/1481)

我屋戸前乃花橘尔霍公鳥今社鳴米

係助詞「ゾ・ヤ・カ」を含む文と同様、係助詞「コソ」を含む文には、単純な連体形節と異なり、TPが存在する。Kuroda(2007)では、係助詞「コソ・ゾ・ヤ・カ」を含む連体形節の補文標識 C_r が非定形(non-finite)の Inf(係助詞「コソ・ゾ・ヤ・カ」)を選択するとし、(46)のような線の表示化が示されている。

(46) [C_P Spec[C [TP Spec[T Inf[VP DP-ga/no[V X V]]]]] C_r]

(Kuroda 2007: 297、一部改変¹⁴⁾)

(46)を用いて(45)の派生を記述すると(47)のようになる。

(47) a. [TP 朝はふる風 - ϕ [T -koso [VP 朝はふる風 - ϕ 寄せめ]]]

b. [TP 今 [T -koso [VP 今 鳴かめ]]]

(47)は、VPにある構成素がTPの指定部に取り立てられ、Infである -koso が付加されることを示している。この係助詞「コソ」は、-wo と連続するときは「ヲ+コソ」となり(48a)、-pa と連続するときは「コソ+バ」となる(48b)。

(48) a. 君をこそかにもかくにも待ちかてにすれ (4/629)

君乎社左右裳待難為礼

b. 我こそば告らめ (1/1)

我許背齒告目

このことから、係助詞「コソ」は格助詞「ヲ」より高く、係助詞「ハ」より低い位置にあることが想定される。このことを示したものが(49)となる。

(49) [C_P [TP [$TopP$ - mo^1 [$TopP$ - pa / - mo^2 [$TopP$ -koso [$FocP$ [VP -wo [VP ...

(49)の統語構造で(48)の派生を簡略的に示したものが(50)となる。

(50) a. [TP [$TopP$ 君 - ϕ -wo-koso [$FocP$ 君 - ϕ -wo [VP 君 - ϕ 待ちかてにすれ]]]]]

b. [TP [TopP 我 *-koso-pa* [TopP 我 ~~*-koso*~~ [VP 我 [V 告らめ]]]]]

3.2. 係助詞「ゾ・ヤ・カ」

連体形終止を要求する下類係助詞「ゾ・ヤ・カ」の助詞の連続には、(51)のようなものがある。

- (51) a. 係助詞「ゾ」: 「ハソ」・「モソ」 / 「ソモ」・「ヲソ」
 b. 係助詞「ヤ」: 「ヤモ」・「ヤハ」・「ヲヤ」
 c. 係助詞「カ」: 「カモ」・「モカモ」・「ヲカモ」

係助詞「ゾ」は、係助詞「ハ」と格助詞「ヲ」に後続する。

- (52) a. 我はそ恋ふる君が姿に (12/3051)
 吾波曾恋流君之光儀尔
 b. 立ちて思ひ居てもそ思ふ (11/2550)
 立念居毛曾念
 c. 萩の花そもいまだ咲かずける (10/2123)
 芽子之花曾毛未開家類
 d. 紫の糸をそ我が搓る (7/1340)
 紫糸乎曾吾搓

係助詞「ゾ」は、*-pa* より高い位置にあり、「モソ」((52b))と「ソモ」((52c))という結合が見られることから、*-mo*¹より低い位置にあると思われる。次に係助詞「ヤ」であるが、これは係助詞「ハ」に先行し、格助詞「ヲ」に後続する。

- (53) a. 松反りしひてあれやは三栗の中上り来ぬ麻呂といふ奴 (9/1783)
 松反四臂而有八羽三栗中上不来麻呂等言八子
 b. 我が背子がやどのなでしこ散らめやもいや初花に咲きは増すとも (20/4450)
 和我勢故我夜度能奈弓之故知良米也母伊夜波都波奈尔佐伎波麻須等母
 c. 相思はぬ妹をやもとな菅の根の長き春日を思ひ暮らさむ (10/1934)
 相不念妹哉本名菅根乃長春日乎念晩牟

このことは、係助詞「ヤ」が *-pa/-mo*²と *-wo* の間にあり、*-koso* と同じ位置にあることを意味す

る。最後に、係助詞「カ」は、格助詞「ヲ」に後続し、二つの係助詞「モ」の間に現れる。

- (54) a. はろはろに思ほゆるかも白雲の千重に隔てる筑紫の国は (5/866)
 波漏々々尔於忘方由流可母志良久毛能智弊仁辺多天留都久紫能君仁波
 b. まそ鏡南淵山は今日もかも白露置きて黄葉散るらむ (10/2206)
 真十鏡見名淵山者今日鴨白露置而黄葉將散
 c. 春日野の藤は散りにて何をかもみ狩の人の折りてかざさむ (10/1974)
 春日野之藤者散去而何物鴨御狩人之折而將挿頭

このことから、係助詞「カ」は、 $-mo^1$ と $-mo^2$ の間の $-zo$ と同じ位置にあることが分かる。以上のことから、係助詞「ハ・モ・コソ・ゾ・ヤ・カ」と格助詞「ヲ」のカートグラフィーを(55)のように示す。

- (55) $-mo^1 > -zo/-ka > -pa/-mo^2 > -koso/-ya > -wo$

本節では、係助詞「ハ・モ・コソ・ゾ・ヤ・カ」が付与される位置と、これに格助詞「ヲ」を加えた係助詞のカートグラフィーの分析を行った。このことにより、上代日本語の統語構造を(56)のように示すことができる。

- (56) a. 終止形節 : [CP [TopP [FocP [TP [TopP $-mo^1$ [TopP* $-pa/-mo^2$ [FocP $-wo$ [VP [VP ...
 b. 連体形節 (a) : [CP [TopP* $-pa/-mo$ [FocP [VP $-wo$ [VP ...
 c. 連体形節 (b) : [CP [TopP [FocP [TP [TopP $-mo^1$ [FocP $-zo/-ka$ [TopP* $-pa/-mo^2$ [TopP $-koso/-ya$
 [FocP $-wo$ [VP [VP ...

4. 「係り結び」構造の分裂文分析

大野(1993)では、終助詞の「ゾ」が「教示・報知・説明」という働きをし、この「ゾ」が文末に出現するような「...ハ...ゾ」という型が上代日本語の基本的な文の一つであると述べている。

- (57) a. 世の中は数なきものそ (17/3973)
 余乃奈加波可受奈枳毛能曾
 b. 紅はうつろふものそ (18/4109)
 久礼奈為波宇都呂布母能曾
 c. 流らへ散るは何の花そも (8/1420)
 流倍散波何物之花其毛

これは、大きな意味で、上類である係助詞「ハ・モ・コソ」で前提を提示し、下類である係助詞「ソ・ナム・ヤ・カ」で特定の陳述(焦点)を行うものとして捉えることが可能である。この「前提-焦点」構造を(58)のように記述する。

(58) 【前提】_{ハ・モ・コソ} 【焦点】_{ソ・ヤ・カ}

このような「前提-焦点」という情報構造は、英語の擬似分裂文(WH-cleft)と類似した構造となる。

(59) a. [CP₁ What t_i is important] [CP₂ is quality_i]

【前提】 copula 【焦点】

b. [CP₁ t_i 流らへ散るは] [CP₂ 何の花そも]

【前提】 【焦点】 copula

(59)で示したように、擬似分裂文はCP₁である「前提」とCP₂である「焦点」を結合する英語の"is"や日本語の「ソ」のようなcopula「繫辞」で結合される。(59b)の日本語については、CP₁内の「ハ」が前提をマークするcopulaもしくは関係詞と考えることによってこれを節と捉えることが可能となる。このような擬似分裂文は複文(biclause)構造であり、歴史統語論の観点からこのような複文構造は、再分析(reanalysis)により汎言語的に単文化(monoclause)する方向性がある(Harris & Campbell 1995)。日本語においても、copulaであった「ハ」が主題マーカーとして文法化して単文化したと考えることが可能である¹⁵⁾。(60b)を擬似分裂文として派生させた構造を示したものが(60)である。

(60) [CP₁ [何の花 ~~-zo-mo~~ 流らへ散る]_{pa}] [CP₂ 何の花 ~~-zo-mo~~]

(60)は、CP₁にある「何の花そも」がCP₂に分裂し、CP₁のcopulaとして~~-pa~~が付加していることを示している。しかし、『萬葉集』の時代には、この「...ハ...ソ」型はすでに単文化されているため、(60)のような派生は行われていないと考えられるが、3.1.で取り上げた「ハ」句の右方転移は、擬似分裂文構造として解釈することが可能であると思われる¹⁶⁾。

(61) (=(42a)) [CP [TP [TopP 我 ~~-pa~~ [VP 大君の醜のみ楯と出で立つ]]] [FocP 我 ~~-pa~~]] (20/4373)

(61)は、本来前提部分となる「ハ」句を右方転移して焦点化することにより、「前提－焦点」という情報構造となっている。この「前提－焦点」という情報構造は、擬似分裂文と同じであることから、(62)のような派生が行われている可能性がある。

(62) [CP₁ 我^{-pa} 大君の醜のみ楯と出で立つ] CP₂ 我^{-pa}]

【前提】

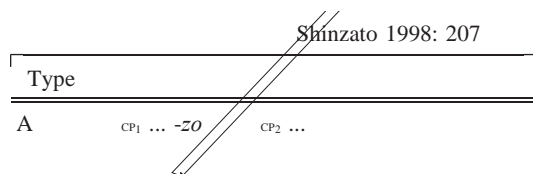
【焦点】copula

(62)は、CP₁にある主語「我^{-pa}」がCP₂に分裂していることを示しているが、この場合、^{-pa}はcopulaとして機能していると考えられる。

以上、上代日本語の文の基本である「...ハ...ゾ」型が複文を起源とし単文化した可能性について述べてきたが、次に「係り結び」構造が複文である It-cleft(分裂文)であるという仮説の基に分析を行う。「係り結び」は、「...ハ...ゾ」型である(58)が(63)のように倒置し連体形で終止する構造となる。

(63) 【焦点】_{ソ・ヤ・カ} 【前提】_{[連体形] (ハ・モ・コソ)}}

上代日本語の「係り結び」構造を分裂文として分析している Shinzato(1998)では、Declerck(1984/1992)が示した3つのタイプの英語分裂文に着目し、上代日本語の「ゾ」による「係り結び」構造にも<表2>で示すような3つのタイプがあることを指摘している。



Shinzato(1998)では、係助詞「ゾ」に関してこのような3つの情報構造の型があることを指摘しているが、同じようなものは係助詞「ヤ・カ」にも存在すると思われる。

まず、前提が旧情報となる Type A には、(64)のような文が例として挙げられる。

- (64) a. うまし国そあきづ島大和の国は (1/2)
 怜何国曾蜻嶋八間跡能国者
 b. ひとりや寝らむ (14/3562)
 比登里夜宿良牟
 c. 国からか見れども飽かぬ (2/220)
 国柄加雖見不飽

このような文は、(65)で示すように、「強い焦点」となる構成素が CP₁に抽出され、copula の役割をする係助詞「ゾ・ヤ・カ」¹⁷が付与される。

- (65) a. [CP₁ うまし国 -zo [] CP₂ あきづ島大和の国は うまし国]
 b. [CP₁ ひとり -ya [] CP₂ ひとり 寝らむ]
 c. [CP₁ 国から -ka [] CP₂ 国から 見れども飽かぬ]

CP₂が新情報を示す Type B は、「起源的には倒置だとしても、広く使われているうちにはそれが一つの定型となり、用法に少しずつの変化が生じた」(大野 1993: 200-201)ものであり、Type A が完全な「...ハ...ゾ」の倒置の特徴を示すのに対して、Type B は倒置できないか、または、倒置できたとしても意味解釈に変化が生じるものである。このことは「係り結び」構造が「...ハ...ゾ」を基底としてそれを倒置して派生するのではなく、焦点要素を CP₁に抽出して分裂文を形成する派生である証拠となると思われる。

- (66) a. 秋といへば心ぞ痛き (20/4307)
 秋等伊閑婆許己呂曾
 [CP₁ 心 -zo [] CP₂ 心 痛き]
 b. 男じものや恋ひつつ居らむ (11/2580)
 男士物屋恋乍将居
 [CP₁ 男じもの -ya [] CP₂ 男じもの 恋ひつつ居らむ]
 c. 八十島過ぎて別れか行かむ (20/4349)
 夜蘇志麻須義弓和加例加由可牟
 [CP₁ 別れ -ka [] CP₂ 別れ 行かむ]

(67)で示す Type C は、節全体が焦点化する構造であり、これは現代日本語の「ノダ」文と相似している¹⁸⁾。

(67) a. その母も我を待つらむそ (3/337)

彼母毛吾乎将待曾

b. ほととぎす鳴く声聞くや

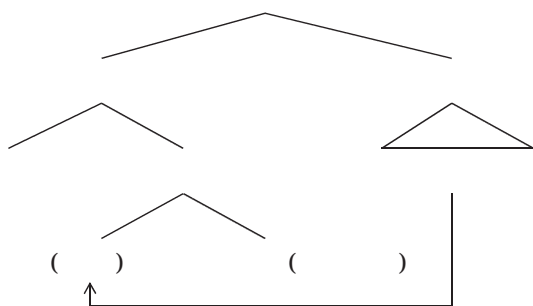
霍公鳥鳴音聞哉 (10/1942)

c. 言出しは誰が言なるか (4/776)

事出之者誰言尔有鹿

Type C は、(68)で示すように、CP₁の TP 全体が FocP の指定部へ焦点移動して派生すると考えられる。

(68)



これにより、(67)の派生は(69)のように記述できる。

(69) a. [CP₁ その母も我を待つらむ -zo] CP₂ その母も我を待つらむ]

b. [CP₁ ほととぎす鳴く声聞く -ya] CP₂ ほととぎす鳴く声聞く]

c. [CP₁ 言出しは誰が言なる -ka] CP₂ 言出しは誰が言なる]

本節では、日本語の「...ハ...ゾ」という基本的な文の型が、擬似分裂文を起源としている可能性を指摘し、分裂文分析により「係り結び」構造の3つのタイプの派生が(70)となることを指摘した。

(70) a. Type A/B: [CP₁ [FocP XP-zo/-ya/ka] CP₂ XP VP]]

b. Type C: [CP₁ [FocP XP-zo/-ya/ka] CP₂ XP]]

5. 結語

本稿では、『萬葉集』を
 インメントにおける格付与
 により、「係り結び」構造
 まず、対格アラインメン

(71) 終止形節

()

()

()

()

活格アラインメントとなる連体形節の主語の格付与には、<図4>のようなNP分裂能格体系が存在する。

n ...	proper nouns	Human +specific	Human -specific	Animate	Inanimate ...
	-ga			-no	
	-ga			-∅	
		-∅	-no		

そして、これらの連体形節の統語構造は(72)のように示すことができる。

(72) a. 連体形節

()

()

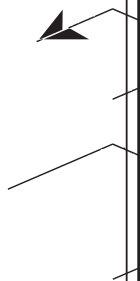
()

()

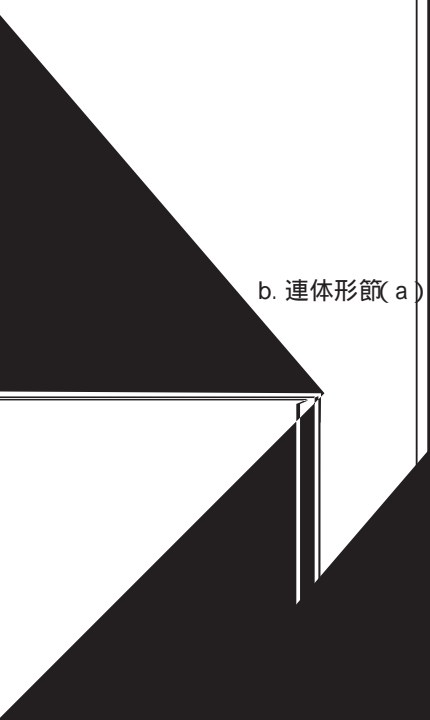
研究

()

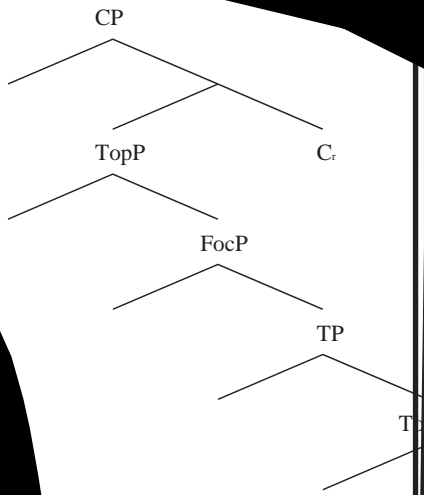
(73) a. 終止形節



b. 連体形節(a)



c. 連体形節 b 型



最後に、「係り結び」構造の分裂構造を(74)に示す。

(74) 「係り結び」構造

() ()

テキスト

国立国語研究所(2018)『日本語歴史コーパス』(バージョン 2018.3, 中納言バージョン 2.4.2)

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

『新編日本古典文学全集(6)萬葉集』小学館

参考文献

Aldridge, Edith (2018) "C-T Inheritance and the Left Periphery in Old Japanese," *Glossa: A Journal of General Linguistics* 3(1) 26, 1-22.

Declerck, Renaat (1984) "The Pragmatics of It-Clefts and Wh-Clefts," *Lingua* 64, 251-289.

Declerck, Renaat (1992) "The Inferential *it is that*-construction and Its Congeners," *Lingua* 87, 203-230.

Dixon, R.M.W. (1979) "Ergativity," *Language* 55-1, 59-138.

Garrett, Andrew (1990) "The Origin of NP Split Ergativity," *Language* 66-2, 261-296.

Harris, Alice C. & Lyle Campbell (1995) *Historical Syntax in Cross-Linguistic Perspective*, Cambridge University Press.

Hiraiwa, Ken & Shinichiro Ishihara (2002) "Missing Links: Cleft, Sluicing, and "No *da*" Construction in Japanese," *MIT Working Papers in Linguistics* 43, 35-54.

Jayaseelan, K.A. (2001) "IP-Internal Topic and Focus Phrases," *Studia Linguistica* 55(1) 39-75.

Jayaseelan, K.A. (2008) "Topic, Focus and Adverb Position in Clause Structure," *Nanzan Linguistics* 4, 43-68.

Kuroda, S.-Y. (2007) "On the Syntax of Old Japanese," Frellesvig, Bjarke, Masayoshi Shibatani

- & John Charles Smith (eds.) *Current in the History and Structure of Japanese*, Kurocio Publishers, 263-317.
- Miyagawa, Shigeru (1989) *Syntax and Semantics: Structure and Case Marking in Japanese* 22, Academic Press.
- Radford, Andrew (2004) *English Syntax: An Introduction*, Cambridge University Press.
- Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," Haegeman, Liliane (ed.) *Element of Grammar: Handbook in Generative Grammar*, Kluwer, 281-337.
- Serafm, Leon A. & Rumiko Shinzato (2005) "On the Old Japanese *Kakari* (Focus) Particle *kosō*: Its Origin and Structure," *Gengo Kenkyu* 127. 1-49.
- Shinzato, Rumiko (1998) "Kakari musubi Revisited: Its Function and Development," *Japanese/Korean Linguistics* 8, 203-216.
- Silverstein, Michael (1976) "Hierarchy of Features and Ergativity," Dixon, R.M.W. (ed.) *Grammatical Categories in Australian Languages*, 112-171.
- Ueno, Takafumi (2017a) "The Diachronic shift of Complement Clauses in Italian: The Establishment of Complementizers in the verbs *sembrare* and *parere*," *Nidaba* 46, 15-24.
- Ueno, Takafumi (2017b) "The *vP* Periphery and the *sCP* Layer in the small Clause of Old Italian," *Journal of Linguistic and Cultural Studies* 48, 15-32.
- Ueno, Takafumi (2018) "The Left Projection of the Small Clause in Old Italian: The Derivation by the Two-Phase Configuration," *Nidaba* 47, 11-20.
- Vovin, Alexander (1997) "On the Syntactic Typology of Old Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 6, 273-290.
- Washio, Ryuichi (2004) "Auxiliary Selection in the East," *Journal of East Asian Linguistics* 13, 197-256.
- Whitman, John (1997) "Kakarimusubi from a Comparative Perspective," *Japanese/Korean Linguistics* 6, 161-178.
- Yanagida, Yuko (2006) "Word Order and Clause Structure in Early Old Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 15(1) 37-67.
- Yanagida, Yuko & John Whitman (2009) "Alignment and Word Order in Old Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 18, 101-144.
- 青木博史 (2015)「終止形・連体形の合流について」, 秋本実治・青木博史・前田満編『日英語の文法化と構文化』ひつじ書房, 271-298.
- 上野貴史 (1994)「英語における Truncated Clefts の談話情報構造」『ニダバ』第23号, 104-112.
- 上野貴史 (2017)「日本語における「ハ」句と「ガ」格の統語機能について: イタリア語の CP Layer との対照」『広島大学大学院研究科論集』第77巻, 31-50.

- 上野貴史 (2018)「イタリア語非対格動詞における補文の通時的変遷：古イタリア語の小節構造」『イタリア学会誌』第68号, 73-94.
- 大野晋 (1993)『係り結びの研究』岩波書店.
- 小路一光 (1988)『萬葉集助詞の研究』笠間書房.
- 半藤英明 (2003)『係助詞と係結びの本質』新典社.
- 三原健一・平岩健 (2006)『新日本語の統語構造：ミニマリストプログラムとその応用』松柏社.
- 柳田優子 (2003)「上代語の句構造と語順の制約について」『言語文化論集』64, 19-40.
- 渡辺明 (2005)『ミニマリストプログラム序説：生成文法のあらたな挑戦』大修館書店.

註

- 1) 11/2175は、『萬葉集』巻第十一、2725番を示す。
- 2) (3)における節は「ク語法」であり、名詞化節の一つと考えることができる。
- 3) Kuroda(2007: 297)では、[Speα C][DP[Agr[[t X V]_{V'}]_P]_P C_s]_P という線の表示化が示されている。これを本稿における記述方法に合わせたものが(4)となる。
- 4) Aldridge(2018: 5)では、上代日本語の格標示を以下の表のように提示している。

	∅	CP
	∅	VP

- 5) 古イタリア語においても、CP位層とTP内の二カ所に談話構造が見られる。詳細については、Ueno(2017a, 2017b, 2018)及び上野(2018)を参照のこと。
- 6) 連体形節の場合、主格-∅は、TではなくVが付与と思われる。
- 7) S_Aは他動詞主語と同じとなる。
- 8) -noは他動詞主語の格標示であることや、-∅も-noも移動を伴わない格付与であることが関係していると思われる。
- 9) Yanagida & Whitman(2009)やKuroda(2007)でも指摘されているように、この統語構造に対する反例が『萬葉集』に1例見られる。
- (i) 佐用姫がこの山の上に領巾を振りけむ(5/872)
佐用比売河許能野麻能閑仁必例遠布利家牟
- 10) C_rは、連体形節の補文標識を示す。

「ナモ」は、「奈良時代には題目語を提示することはなかった。述部にあつて (99, 101)であり、歌には使用されないため『萬葉集』には例外的な一例がある。このため、本稿では、係助詞「ナム(ナモ)」を考察の対象から外す。連属したものである。

における TopP は、(i)のように複数回出現することから繰返し性 (recursion)

が産業をば思はずる (16/3865)

之産業乎波不念呂

ら *ka* [TopP 妻子が産業 -*phi*-*wo*-*pa* [FocP 妻子が産業 -*phi*-*wo* [VP 荒雄ら [V 妻子
はずる]]]]]]

(7) は、[Spe(C) [Spe(I) [Infl [DP-*ga*/*no* [X V]_V]]]_P C_s]_T]_P とい
されている。

、それまでなかった TP の出現を引き起こしたと考えられる。

存在しない補文標識「ノ」の発達により、現代日本語では(i)のような擬似
することになる。

べたの] は [CP₂ この柿だ]

、それぞれの係助詞が有する意味素性に依存すると考えられる。例えば、
(1)では、-*zo* が ± 疑問焦点、-*ya* が [-wh 疑問、-*ka* が [± wh 疑問、という
している。

ata (2002: 43)では、現代日本語における「ノダ」文は、(i)に示すように、
元位置焦点構造から派生するとしている。

()

()

()

上代日本語には補文標識がないため、元位置焦点構造は存在しないと思われる。このため、本稿では焦点移動で Type C も派生すると考える。

A Study of the Syntactic Structure in Old Japanese

- *Kakari musubi* Construction at *Man'yôshû* -

Takafumi UENO

Key words: kakari particle, cartography, active language, cleft sentence, nominalized clause

This paper aims to define the typical syntactic structure of Old Japanese at *Man'yôshû*. In Old Japanese, two types of alignment exist: the accusative alignment and the active alignment. While the accusative alignment appears in independent clauses which end in the conclusive form (*syusi-kei*), the active one accompanies subordinate clauses which close in the adnominal form (*rentai-kei*). I point out that these alignments have a different Case-marking. Furthermore, by focusing on the cartography of syntactic structures in kakari particles, I analyze *kakari musubi* as a cleft sentence.